

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

中国と日本の中学校英語教科書の比較 : 異文化理解とアクティブ・ラーニングを中心に

| | |
|-----|---|
| 著者 | 林 傑暁, 櫻井 千佳子 |
| 雑誌名 | 武蔵野教育學論集 |
| 号 | 6 |
| ページ | 103-114 |
| 発行年 | 2019-03-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1419/00001058/ |

中国と日本の中学校英語教科書の比較

—異文化理解とアクティブ・ラーニングを中心に—

A Comparative Study of English Textbooks
for Junior High School Students in China and Japan:
How Intercultural Understanding and Active Learning are Achieved

林 傑 暁^{*}
LIN Jiexiao[†]
櫻 井 千佳子
SAKURAI Chikako

1. はじめに

1970年代から現在にかけて、中国では市場経済が取り入れられて経済が急速に発展してきた。このような経済発展を背景に高い英語力が求められた結果、英語は外国語教育の中心を占めるものとなってきた。実際に、中国では、英語教育は、多くの地域で小学校1年生から実施されている。また同時に、英語は全国大学統一試験に欠かせない科目として重視されている。具体的には、CET 4と呼ばれる全国的な英語力検定試験に合格しないと卒業できない大学も多く存在している。このような社会的状況から、中国の英語教科書では、英語の4技能の徹底的な習得が模索されている。そして、近年の傾向として、中国の小学校、中学校、高等学校では、アクティブ・ラーニングを活用した4技能の実践もよく見られる。

一方、日本では、2017年3月31日に告示された小学校学習指導要領により、小学校中学年（3、4年生）には外国語活動が、高学年（5、6年生）には教科としての外国語が導入されることになった。授業時数は外国語活動が年間35単位時間、外国語が年間70単位時間となる（小川・東、2017）。このように英語教育の必修化、低学年化が進んでいる背景として、太田（2008）で指摘されているように、「ゆとり教育」が行われた結果、現在の学習者の英語の4技能のレベルはアジア圏の韓国や中国より低いという現状への強い問題意識がある。また、鈴木（2000）では、日本の中学校の英語教科書を調査した結果、扱われている異文化理解に関する内容の数が非常に多いことが明らかになっている。鈴木（2000）では、中国の英語教科書は異文化理解に関しての内容は日本より少ないとも述べられている。

現代社会のグローバル化が言われて久しいが、その中で英語力を高めることが急務である。そして、多文化共生のための英語教育を考えた時に、異文化理解とコミュニケーション能力の育成も求められている。本稿では、中国及び日本の中学において最もよく使用されている教科書を1

^{*} 武蔵野大学大学院教育学研究科 [†] 武蔵野大学教育学部

種類選び、その内容について比較分析を行う。本稿の目的は、中国と日本の英語の教科書を比較することによって、グローバル化社会の中で、英語教育において異文化理解教育がどのように寄与するか、また、アクティブ・ラーニングを活用することで、中国及び日本の英語教育改革に寄与できることは何かを明らかにすることである。

2. 研究の背景

中国と日本の英語教育における根本的な相違は、使用テキストの内容に関わることと外国語教授法・学習法に関わることに大別される。太田（2008）によれば、日本の中学校検定英語教科書の語数は文部省の学習指導要領により約 1500 語程度であり、平成 19 年度の「ゆとり教育」版では、中学校検定教科書の語数は約 900 語に減少した。それに対して、上西（2013）で言われているように、日本の中学校 1 年生の英語教科書の総語数は、タイや中国の小学校 1 年生の教科書の総語数よりはるかに少ないという指摘もある。教育制度面では中国では 2003 年から小学校 3 年生から英語科が必修化され、上海などの大都市では小学校 1 年生から英語が行われてきている。また、岡野（2017、p.261）は中国の英語教育について、「英語が将来の成功のために必須であるという中国人の意識と小学校から高校までの一貫したカリキュラムが連携し、大学卒業という出口に設けられた英語統一試験へ繋がっていく」と述べている。このように中国では、将来の活躍するために英語の大切さを実感し、明確な目標を持って英語教育に努力を注いできた。

しかしながら、中国の英語教育における問題も指摘されている。Hao and Otani（2016）によれば、CNKI における 2012 年から 2016 年にかけての中国の高校英語教育における問題を調査した 25 本の論文の内容について検討したところ、その中の 12 本は主に全国統一大学試験についての問題を指摘しており、また中国の英語教育において、中国文化と英語教育の連結が緊密ではないことを批判したものは 6 本であったことが分かっている。また、Hao and Otani（2016、p.69）で、“The National Matriculation Test has brought an enormous impact on the whole high school education system. From the perspective of English education, this will be further analyzed from the following three aspects: English Teachers in a dilemma between CBER(China’s basic education reform) and NMET (National Matriculation Test); Students’ test-oriented English learning values; and reasons behind the problems.”と述べてられているように、教育の指標を達成するために、教師には大きなストレスがかかる。それは、統一試験により良い点数を取るために、一生懸命を勉強させて、可能な限り高い点数を取得させるためである。したがって、中国では、英語教育の果たす役割に、文化を発信すること、異文化理解を学ぶことが含まれることは理解しながらも、語彙や文法の学習といった技能面に重点を置く傾向がある。新保（2011、p.44）は「教科書の内容について、日本は異文化理解を重視し、国際平和に重点を置いている。一方、中国は、道具として英語を使いこなし、自国の人物・文化について、英語で表現できるようになることに主眼が置かれている。そのため、万里の長城、中国人宇宙飛行士など、中国に関わる内容が多い」と述べている。確かに、中国の中学校の英語学習においては、英語で物事を表す表現力を育成することに主眼が置かれている。その一方、日本の英語教育の目標は、異文化理

解やコミュニケーション能力の育成、4技能のバランスの取れた育成を主たる狙いとしている。これは、2020年の東京オリンピックの開催と無関係ではなく、グローバル化の社会で、異文化理解とコミュニケーション能力がこれから一層重要になっていくという世の中の認識とも一致している。

以下に本稿では、中国と日本の英語の教科書の比較を通じて、それぞれの国で、英語4技能の育成がどのようにされているのが、そこに異文化理解能力の育成という観点があるのか、さらにその中でアクティブ・ラーニングが果たす役割について調査し検討していく。

3. 教科書の比較分析と考察

3.1 学習指導要領や課程標準で示されている学習目標の比較

日本の新学習指導要領では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成すること」が外国語活動の目標となっている。一方、中国の中学校の課程標準では「英語についての技能、知識、愛情、学び方、文化の意識を基礎としての初歩的な総合能力を養い、生徒の全面的な成長を目指す」と規定されている（教育部）。

日本はコミュニケーション能力の育成を図り、中国は生徒の全面的な成長を目指す傾向にある。この対比は、王（2015、p.38）の次の指摘からも明らかである。「日本の英語教育は英語の中の四つの技能を深めつつ、英語を媒介にして日本の文化とは異なる文化などを学び、英語力を上げることが目指している。一方、中国では、英語教育の中で、英語の知識・技能を深めることが狙いにあるが、英語を通して様々な学習の方法や感情面の豊かさを深めることが課程標準に記載されている」。つまり、日本の英語教育では異文化理解に関わる内容の学習が注目されていて、中国の英語教育では4技能の学習が徹底的に行われている傾向にあることがわかる。

また、2017年に告示された新学習指導要領については、その方向性に関する研究が行われているが、特に注目すべき点として、小泉（2017）でも指摘されているように、新しい学習指導要領では、「生きる力」を高めるに至るプロセスを教育の目的とする視点が明確に打ち出されているということがある。そして、児童・生徒が学びの主体となり、様々な場面で自発的に考え、仲間と意見を交換し、情報を共有しながら学びを深められるようデザインされた授業を行う「アクティブ・ラーニング」の視点が取り入れられている。この考え方は、単に知識中心主義の教育への反省だけでなく、対話する力、協力し合う力を学びの中で育むことを重視しており、それは言語によるコミュニケーションの育成にもつながっている。外国語の背景にある文化に対する理解を深め、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことが、新学習指導要領の一つの目標となっているのである。小泉（2017）は、「新しい学習指導要領で示された外国語によるコミュニケーションの仕方を学ぶ過程で、子供達が様々なことを体験しながら、思考力、判断力、表現力、対人関係力などを伸ばしていくことを期待したい。そこに言語によるコミュニケーションに対する積極的な態度がプラスされて、グローバル時代の未来の大人たちにとって必須の「生きる力」が育まれると言えるだろう」と述べている。つまり、知識や技能の習

得のみならず、課題において得られた情報や表現を選択したり活用し、話したり書いたりすること、情報を整理しながら考えなどを形成することが肝要なのである。

3.2 教科書の構成の比較

日本の新学習指導要領においては外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせることが大きな目標として掲げられている。また、4技能それぞれの目標が詳しく書かれている。一方、中国では、英語教育の中で、英語の知識・技能を深めることに狙いがあり、英語を通して様々な学習の方法や感情面の豊かさを深めることが課程標準に記載されている。本稿では、日本、中国で使用されている教科書を種類ずつ選び、その構成から分析を試みる。

日本の教科書は開隆堂が作成した *Sunshine*、中国の教科書は人民教育出版社の作成した *Go for it* を分析対象とした。日本の中学校の英語教科書は各学年1冊であり、中国は各学年上冊・下冊の2冊を使っている。本研究では日本の中学3年生の教科書と中国の3年生の教科書を比較対象となる。


3.2.1 全体的な特徴

全体的から見ると、日本の教科書は文字が相対的大きくて、絵も多い。それに対して、中国の教科書は文字が小さくて多いし、絵も少ない。そして、最も特徴的なのは、日本の教科書は英語と日本語の組み合わせで書かれている。中国の場合は英語のみ表記されていることである（図1 全体的特徴）。

図1 全体的な特徴

***** UNIT 1 *****

2a Listen and check (✓) the questions you hear.



| Questions | Answers |
|--|---------|
| 1. Do you learn English by watching videos? | _____ |
| 2. Do you ever practice conversations with friends? | _____ |
| 3. What about listening to tapes? | _____ |
| 4. What about reading aloud to practice pronunciation? | _____ |
| 5. Have you ever studied with a group? | _____ |

2b Listen again. Match each answer below with a question above.

a. Yes, I have. I've learned a lot that way.
b. Oh, yes. It improves my speaking skills.
c. I do that sometimes. I think it helps.
d. No. It's too hard to understand the voices.

2c Make conversations using the information in 2a and 2b.

A: Have you ever studied with a group?
B: Yes, I have. I've learned a lot that way.

2d Role-play the conversation.

Jack: Annie, I'm a little nervous. I have to finish reading a book and give a report next Monday.
Annie: That doesn't sound too bad.
Jack: But I'm a very slow reader.
Annie: For the first time, just read quickly to get the main ideas. Don't read word by word, read word groups.
Jack: But I don't understand many of the words. I have to use a dictionary.
Annie: Try to guess a word's meaning by reading the sentences before and after it. You probably understand more than you think.
Jack: That sounds difficult!
Annie: Well, be patient. It takes time. You can become better by reading something you enjoy every day. The more you read, the faster you'll be.

英語好教師

***** How can we become good learners? ***** UNIT 1 *****

3a Read the passage about Wei Fen and answer the questions.


1. Why did Wei Fen find it difficult to learn English?
2. What did she do in English class?
3. What is the secret to language learning?

How I Learned to Learn English

Last year, I did not like my English class. Every class was like a bad dream. The teacher spoke too quickly. But I was afraid to ask questions because my pronunciation was very bad. So I just hid behind my textbook and never said anything.

Then one day I watched an English movie called *Toy Story*. I fell in love with this exciting and funny movie! So then I began to watch other English movies as well. Although I could not understand everything the characters said, their body language and the expressions on their faces helped me to get the meaning. I also realized I could get the meaning by listening for just the key words. My pronunciation also improved by listening to the interesting conversations in English movies. I discovered that listening to something you are interested in is the secret to language learning. I also learned useful sentences like "It's a piece of cake" or "It serves you right." I did not understand these sentences at first. But because I wanted to understand the story, I looked up the words in a dictionary.

Now I really enjoy my English class. I want to learn new words and more grammar. Then I can have a better understanding of English movies.



3b Complete the sentences with what Wei Fen learned from watching movies. Use words and phrases from the passage.

1. I can understand the meaning by watching their _____ and the _____ on their faces.
2. I can get the meaning by listening for just the _____.
3. My pronunciation improved by listening to the _____ in English movies.
4. I learned _____ sentences like "It's a piece of cake" by watching the movies.
5. I can get the meaning of the new words by looking them up in a _____.

3.2.2 全体的な構成

日本の教科書には、9つのプログラムがある。各プログラムは、basic dialog, listen, speak, try, write で二回繰り返して構成されている。つまり、英語を「聞く、話す、読む、書く」基本的な力を総合的に身につけさせる。その他、power-up という4技能の練習がそれぞれ各プログラムの間に入っている。コミュニケーション活動を通して、各技能をさらに伸ばすためのシリーズとして設けられている。Listening と speaking は3章ずつ扱われていて、writing の練習が2章ある。英語のしくみ（文法）の解説と練習は全書に4章ある。そのほか、my project という総合的な内容も扱っている。4技能とアクティブ・ラーニングの組み合わせで学習者の英語力を高める。

中国の教科書は、上冊・下冊合わせて14章がある。各章はSection A と Section B で構成されている。Section A には Warm up、Listen、Speak、また Listen を繰り返し、Speak、Role-play を行う。Section A の最後は、Reading、Writing と文法の練習を行っていく。Section B に関しては、Listen、Write、Role-play の後、Section A の Reading より長くなる文章を読んで、文章に関する質問を解答することである。各ユニットの最後はまとめとして Self check の練習問題が載っている。

日本の教科書では、内容的に深みのある題材も取り上げられている。例えば、環境問題に関する主な題材として The 5 rs to save the earth、Clean energy sources（3年）がある。異文化相互理解に関する主な題材は「国際フードフェスティバル」（1年プログラム6）と So many countries, so many customs（2年プログラム10）である。そして、日本の文化や特色についての題材、日本文化を発信する内容も扱っている。例えば、Volcanoes in Japan、Sushi-go-around in the world（3年）などの題材も紹介されている。

それに対し、中国の教科書では4技能の学習が徹底的に行われている。日常生活のシーンをテーマとして、それに踏まえて4技能の学習が展開される。表1は日本と中国の中学3年の英語教科書の各章のタイトルを示している。この表から全体的な構成と内容についての相違がわかる。

表1 日本の教科書と中国の教科書の全体構成

| 日本の教科書 | 中国の教科書 |
|--|--|
| Program1: A history of vegetables. | How can we become good learners? |
| Power-up: Listening & Speaking 旅行 | I think that mooncakes are delicious! |
| Program2: Volcanoes in Japan | Could you please tell me where the restrooms are? |
| Program3: The 5 Rs to save the earth | I used to be afraid of the dark. |
| Power-up: speaking 道案内 | What are the shirts made of? |
| My project: あの人にインタビューしよう | When was it invented? |
| Program4: Reading: Faithful elephants | Teenagers should be allowed to choose their own clothes. |
| Power-up: writing お祝い・お礼メール | It must belong to Carla. |
| Program5: sushi-go-around in the world | I like music that I can dance to. |
| Power-up: speaking 電話 | You are supposed to shake hands. |
| Program6: let's talk about Japanese things. | Sad movies make me cry. |
| My project: 日本文化を紹介しよう | Life is full of the unexpected. |
| Program7: what is the most important thing to you? | We are trying to save the earth. |
| Power-up: listening アナウンス | I remember meeting all of you in Grade 7. |
| Program8: clean energy sources | |
| Power-up: writing ホームページで学校紹介 | |
| Program9: reading | |
| Power-up: listening 有名人の名言 | |
| Special project: 卒業に向けて一思いを伝えよう | |

3.3 教科書の内容の比較

3.3.1 4技能を具現化した教科書例

上記の観点に基づいて、日本と中国の中学英語教科書における4技能がどのように工夫されるか教科書の本文や設問を詳しく分析することにより比較検討する。日本と中国の3年生の教科書の一章の構成の例を挙げる。(表2、3)

中国の教科書には、4技能の「聞く」、「読む」に関する内容が多い。「聞く」については会話を聞き、リスニングに関する質問を答えるのは基本的な形となっている。内容を把握し、ポイントをつかむことが要求される。「読む」は長文と短文の2種類の文章問題が掲載されている。短文を読み、キーワードを用いて英文空欄を完成するのは一般的な形である。長文に関する質問は

三つか四つがある。文章をよく理解し、質問を解答する能力が必要とされる。会話を作ったり、ユニットと関わる文章を書きたりするのは「話す」と「書く」の主な内容である。その上、長い文章の質問の中、簡単なディスカッションも「話す」こととして載っている。内容を見ると、異文化理解に関することが少なく、各章にはロールプレイやディスカッションも扱われているが、4技能を徹底的に行うという特徴が顕著である。

日本の教科書のプログラム1のA history of vegetablesを見ると、三つの小さな目標が書かれている。それぞれは、「されたことについて、言えるようにしよう」、「すでにしてしまったことや、今ちょうどし終えたことを言えるようにしよう」、「もう何かをし終えたかどうかをたずねたり、答えたりできるようにしよう」である (p8,10,12)。すなわち、プログラムの目標は事柄を英語で言えるようにすることである。つまり、英語教育を通してコミュニケーション能力を図るということは学習指導要領と一致していることが分かる。各プログラムは3節に分けられ、各節が同じパターンとなっている。「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」という4技能は均等に分けられる。リスニングとリーディングは中国と比較すると、短くて、簡単である。会話や文章に関する質問が一つしかない。また、教科書の右側に new words や word box が載っているのも、学習者にとって参考もなる。

各節の重要な文法は一つであり、内容はこの文法に基づいて作られている。一方、中国の教科書では、総合的な文法知識が必要になって課題が多く掲載されている。

教科書の構成については、もう一つ大きな違いがある。それは、日本の教科書には「power-up」という4技能を訓練する単元と「英語のしくみ」という文法のまとめが設けられていることである (表1)。学習者の生活に踏まえて状況を4技能のテーマとして練習を行う。また、日本の各学年の教科書に My project が3回ある (表1)。各プロジェクトは定められている主題に従ってアクティブ・ラーニングの活動を行う。この活動を行うためには、新聞や記事を読んだ上でペアになって会話を作ったり、情報を調べたり、発表したりするためには協力し合う能力が不可欠である。この My project の詳細について、次の節で分析する。

表2 中国の教科書 *Go for it* におけるユニットの構成

| ユニットの構成 | 内容 |
|----------------|---|
| Section A | ユニットに関する準備活動 |
| Warming up | ランゲージゴールを明らかにする |
| Listen & speak | 会話を聞き、質問を解答する テーマに踏まえて会話を作る |
| Listen & check | 新しい会話を聞き、内容をチェックする |
| Listen again | 会話をもう一度聞き、内容に関する質問 |
| Speaking | 上の会話に基づく、会話を作る |
| Role-play | 作った会話にしたがったロールプレイ |
| Reading | 短い文章を読む。文章に関する三つの質問を答えて、英文空欄を補充する。 |
| Grammar focus | 英文空欄を補充 自分のことに踏まえる作文を書いたり、ディスカッションしたりする |
| Section B | ユニットに関する準備活動 |
| Warming up | 絵と一致する単語を選択 |
| Listening | 内容に関する質問を答える 英文空欄を補充する パートナーとディスカッションする |
| Reading | 一ページほどの長い文章を読む 文章に関するいくつかの練習問題をする |
| Writing | テーマと関わる作文を書く |
| Self-check | ユニット全体の把握をチェックする練習問題 |

表3 日本の教科書 *Sunshine* におけるプログラムの構成

| プログラムの構成 | 内容 |
|---------------|-------------------|
| 1. Warming up | 基本的な会話による文法を及ぶ |
| Listening | 会話を聞き内容に合う絵を選ぶ |
| Speaking | 例にならない絵を説明する |
| Trying | パートナーとクイズをする |
| Reading | 短文を読む、質問を考える |
| Writing | 本プログラムの文法を使って文を書く |
| 2. Warming up | 基本的な会話による文法を及ぶ |
| Listening | 会話を聞き内容に合う絵を選ぶ |
| Speaking | 例にならない絵を説明する |
| Trying | 例にならない会話を作る |
| Reading | 短文を読む、質問を考える |
| Writing | 文法を使って文を書く |
| 3. Warming up | 基本的な会話による文法を及ぶ |
| Listening | 会話を聞き内容に合う絵を選ぶ |
| Speaking | 例にならない絵を説明する |
| Trying | 友達と対話する |
| Reading | 短文を読む、質問を考える |
| Writing | 文法を使って文を書く |

3.3.2 アクティブ・ラーニングを具現化した教科書例

以上述べたように、教科書の内容について、日本は異文化理解を重視し、国際平和に重点を置いている傾向にある。中国は、道具として英語を使いこなし、自国の人物・文化について、英語で表現できるようになることに主眼が置かれているという印象がある。また、生徒が学びの主体となり、様々な場面で自発的に考え、仲間と意見を交換し、情報を共有しながら学びを深められるようデザインされた授業を行う「アクティブ・ラーニング」の視点も近年注目されるようになってきた。教科書の中、ディスカッションや発表でアクティブ・ラーニングの実践もしている。

それでは、異文化理解とアクティブ・ラーニングの視点から、中国と日本の教科書はどのように工夫されているかについて具体例を検討する。

日本の3年生の教科書の My project「日本文化を紹介する」は日本の文化や特色についての主題である(図2)。

世界で様々な伝統行事の紹介の仕方を学び、日本の伝統行事や文化を英語で紹介するのを本プロジェクトの目標とした。まずはハロウィンについての紹介を読んで、内容を理解して把握する。右頁に載っているハロウィンの写真が学習者の興味を引き出す。次に、十五夜の起源に関する紹介の文を正しい順番で並べる形で、日本文化を英語で勉強する。そして、日本の伝統行事や

有名な祭りなどの名称、時期、起源、昔や今の風習についてのことを調べさせたり、文を書かせたりしてする。その上で書いた文を組み合わせ、スピーチ原稿を作らせる。「協働：グループの友達の前稿を読んで、お互いにアドバイスしましょう」で見られるように、その前に書いたスピーチ原稿を友達同士と討論し、アドバイスをお互いに提供するという活動がある。最後は発表を行う。発表が終わったら、自分の発音や内容を自己評価させる。「協働：発表全体を振り返って、他の人の良かった点や改善点などを話し合しましょう」という活動がある。自己評価のみならず、他人の発表に対してよいと思ったところをメモして自分の発表に生かせるように展開されている。異なる伝統行事に関する文章をきっかけとして、自国の伝統行事を習得させる。また、主体的に資料を調べさせ、スピーチの原稿を書かせることで発表を準備する。発表する前に1回の協働学習をさせてお互いの意見やアドバイスを聞き、発表を行う。最後2回目の協働学習でプロジェクトを終わらせる。このように異文化理解と自国文化を発信することはアクティブラーニングの形で習得させる。学習者は主体的、協働的に英語を勉強すると同時に、異文化や日本の伝統文化についての知識がさらに豊かになるのである。

中国の教科書では1つの章で全部異文化理解や自国文化を習得する内容が載せているものが少ない。例えば、How can we become good learners? I think that mooncakes are delicious! など、生活の場面を章のテーマにして英語を勉強する。異文化理解や自国文化を発信することを主題とする章がないが、章の中に異文化理解と関わる内容も扱われている。例えば、第5章で What are the shirts made of? のセッションBのリーディングは中国の「孔明燈」、「紙切」、「陶器」についての伝統文化を紹介している。文章に関する質問をして、グループディスカッションで故郷の有名なものを紹介する。異文化理解の内容が載っているが、目的としては4技能の習得に強調が置かれている。

本節では、現在日本と中国の中学校で使われている教科書のそれぞれの特徴や相違、異文化理解題材とアクティブラーニングに関する考察をまとめた。考察結果として、中国の教科書では聞く、読む、話す、書くという4技能に主眼が置かれ展開されていることがわかった。日本の教科書の難易度は中国の教科書より低いことがわかるが、テーマの題材は様々な素材が扱われている。特にMy projectで異文化理解や自国文化の発信に関する題材をテーマにしてアクティブ・ラーニングを活用して展開する授業が特徴的である。異文化理解教育の活動は多方面にわたっているが、英語教育でできる異文化理解には限界があることも否定できないと指摘されている。大川(2018)では、英語教育における異文化理解教育の限界の一つは体験する授業が少ないことであり、言語習得は知識的なものとして達成しやすいものであることは知られているが、体験的に文化を学ぶことについては英語科では限界があるということが指摘されている。

4. おわりに

2020年の東京オリンピックを眼前にして、日本では、グローバル社会の一員として、国際共通語としての英語を習得する必要性が高まっている。外国語でコミュニケーションができるようになるため、新学習指導要領では、4技能において、どのようなことが英語でできるようになる

のか、という観点から多様な話題についての教材が提供されている。このような教材を通じて、さらに、どのように高いレベルの語彙力と文法の難易度を充実し英語力の向上を図ることができるのか、ということも課題になっている。特に、学生の負担にならないように、4技能をどのようなバランスで工夫させるよいかということについても考えなければならないと議論されている。

英語が将来の成功にとって不可欠と捉えている中国の学生にとっては、社会的な成功が英語学習に向けて共有された学習動機である。しかしながら、グローバル社会に生きる中国人として、自文化の理解、広い視野から国際理解を深め、国際協調の精神を養うことが必要になってくる。この観点に基づいて教科書の題材を再検討することも必要であろう。現在使われている教材の各章のテーマは日常生活に関するものが多く、国際理解、伝統文化に関する題材が少なかった。単に知識を得ることで終わるだけでなく、文化に対する関心を高め、異文化に対する尊重を持つように、これから多様な題材、特に異文化、自文化の内容を増えるようにする改善の余地がある。

日本の新学習指導要領では、主体的に学ぶ姿勢が求められており、コミュニケーション能力の育成が意図されている。協働学習、ディスカッションや発表することなど、アクティブ・ラーニングは外国語の習得にどう生かせるのか考えることが今後の課題となっている。特に、アクティブ・ラーニングを用いた英語教育は、異文化理解の題材について学習者に動機付けを与えながら、習得させることが可能であるという点において、寄せられている期待が高い。中国においても、基礎教育課程改革の目標で、「受身的な学習や丸暗記、機械的訓練の現状を改め、学習者が主体的に参考し、探求を楽しみ、体を動かすことを主導し、情報の収集、選択、処理する能力、新しい知識を獲得する能力、問題の分析・解決能力及び交流・協力の能力を育成する」という目標が掲載されている。このように、外国語としての英語習得において、その学習方法は単なる暗記では済まされなくなってきた。ここ数年、英語教育のみならず、教育全体に主体的に探求することの大切さ、学びを実践することの重要性が言われており、その流れから考えても、英語の習得には主体的、協働的に学習者が取り組めるような内容が増えることが望まれている。そして、その中で、4技能が錬成されるべきである。外国語を学ぶにあたっては、学習者にとって、その外国語が使われている社会、文化的背景、そのものに関心を持つことが主体的な学びへの動機付けとなりうると考えられる。異文化を理解し、人々と共生しようという心を育むことが、この主体的な学びを支えるのであり、そこにアクティブ・ラーニングが寄与される可能性があると言える。

謝辞

本研究にあたり、林傑暁の指導教授である武蔵野大学大学院教育学研究科の荒木貴之教授には、貴重なご助言をいただきましたことに厚く御礼を申し上げます。

※本稿は、日本アクティブ・ラーニング学会第3回全国大会（神田外語大学）で発表したものに加筆修正を加えたものである。

参考文献

アダチ徹子 ほか (2018) 『sunshine』 開隆堂

上西幸治 (2013) 「小学校英語テキスト再検討」 広島大学外国語研究教育センター

大川光基 (2018) 「異文化理解教育の可能性の検証 中学校英語教科書における文化題材から」

『第59回 中村英語教育賞入選論文』

小川隆夫・東仁美 (2017) 「学習指導要領に見る外国語活動と外国語」『小学校英語 はじめる教科書』
日新印刷株式会社

太田信雄 (2008) 「諸外国から見た日本の英語教育」『国府台経済研究 第19巻第1号』 27 - 29

岡野恵 (2017) 「中国の英語教育における到達目標と学習ストラテジーの育成」『大正大学研究紀要』 261

王明潔 (2015) 「日本と中国における英語教育の特色と動向」『教育科学論集』 38

小泉仁 (2017) 「新しい学習指導要領の方向性」 光村図書出版社

新保敦子 (2011) 「現代中国における英語教育と教育格差 少数民族地域における小学校英語の必修科を
めぐって」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』 39 - 44

劉道義 ほか (2011) 『go for it』 人民教育出版社

Jingxin,H & Midori,O.(2016). English education in high schools in china:It' s current status and problems
66-69